

A photograph of a building's exterior, likely a library or university building, with a sign that reads "箱の中の彼女 / ポイント4129". The sign is written in a stylized, handwritten font. The building has a brick facade and several windows. The lighting is dramatic, with strong shadows and highlights.

箱の中の彼女 / ポイント4129

北原 亜稀人

箱の中の彼女

漸く雨も上がり、黒っぽい雲の隙間からは夕暮れ空が見え始めていた。退屈で平穏な片側一車線の県道、マイカーは悲鳴をあげながら突き進んでいく。目的地、特に無し。言うなれば、逃亡。追いつかれないように、早く、遠くへ。

平成七年式スターレット。かつては鮮やかだった緑色のボディはクリア塗装の剥げ落ちがひどくて、いかにもみすぼらしい。町外れに路上駐車するだけで廃車に見える。我が物ながら悲しいけれど、まだ走る以上、捨てようかという気にもならない。せっかく、後二万キロ乗れば二十万キロの大台なのだ。どうせいずれは解体するのならせめて天寿を全うさせてあげたいと僕は思うのだけれど、なかなか分かってくれる人は少ない。

傷だらけ、油膜だらけのフロントガラス、煙草穴だらけのシート、動かないエアコン、感度の悪いラジオ。たまに引っかかって動かなくなるワイパー。ラジオからはいつだって最新の情報が流れてきているのだろうけれど、僕の耳に飛び込んでくるのは、断末魔の呼気のような雑音が八割、その隙間でかろうじて生きのびているDJの声が二割。そもそもよく聞き取れないのだから、それが最新の情報だろうと何だろうと全く関係がない。百年前のニュースが流れていたとしても、たぶん僕は気づかないだろう。それでも僕はラジオをつけたままにしている。何のことはない。スイッチが馬鹿になってしまって、上手くオン・オフができない。それだけの話だ。

もはや手遅れ、と言えるほどにみすぼらしい車の状態だから、せめて、と思い車内だけは綺麗にしていた。十個目の焦げ痕を作ったとき——二年半くらい前だ——車内禁煙にしたし、コーラを一リットル近くぶちまけた時——五年前。あれは厳しかった——緑茶以外の飲食も禁止にした。シートの上にモノは置かない。荷物はすべてまとめてリアハッチへ。ポロ車の中はいつも清潔だった……今日までは、と注記しておく必要があるが。今日僕は助手席のシートに荷物を置いたし、車内でコーラを飲んだ。しかもそのコーラの缶に灰を落としながら煙草まで吸った。ちょっと、いろいろあったのだ。



休日の暇つぶしに買い物でも行こうか、と思い車庫の自分の車に乗り込もうとした時、僕は自分の車の下に覚えの無い何かがあることに気がついた。黒くて、小さくて、複雑な形をしたもの。嫌な想像を振り払いながら軍手をはめてそれをゆっくり引きずり出すとちゃんと想像通り、猫が一匹、僕の車の下で死んでいた。ちょっと見てすぐに、よく家の周りを歩き回っていた野良猫であることが分かった。つい見てしまった猫の目。死んでしまっている、と自己主張しているかのようにその目には光が無くて、僕は思わず顔を背けた。冷たくて、硬かった。

両親も、祖父母も健在、ペットを飼ったこともなかった僕にとって、“死”というのは曖昧なイメージでしかなかったのだ。生物的に「死、がどういうものかは理解しているつもりで、実際のところ、何一つ理解していなかったのだと思う。本物の死の重みや冷たさは僕の想像を凌駕して余りあるものだったし、光を失った目がその影の中に僕を追い落とすのはとても簡単なことだった。重くて、冷たくて、悲しくて、痛ましかったし、それらの言葉を頭の中に順番に並べてみてもまだ足りないほどに、それは衝撃に満ちていた。

いつからか近所に住み着いたメスの野良猫。僕は勝手に“リリー”と名付けていた。リリーはどういうわけか我が家の付近が気に入っていたらしく、特にガレージを自宅と定めていた様子だった。おかげで、周辺はいつでも彼女の排泄物の臭いに満ちていたし、僕のみすぼらしい車は爪あとだらけだった。タイヤをパンクさせられたこともある。生贄に捧げたかのような鼠の死体を置き捨てられたこともあった。つまり、僕は彼女に嫌がらせをされていたようなものだ。そうであるにも関わらず、死んでくれたおかげでせいせいしているかと言えばそういうわけでもない。僕の心の中を何度も蠢き回っていたのは「リリーが死んでしまった、という言葉。それに、寂しさ、悲しさ。嬉しくなんか、まるで無かった。

手近にあった段ボール箱の中に贈答品のタオルを三枚入れて、僕はその中にリリーを入れた。ガムテープで蓋を閉じて、そのまま車の助手席に箱を置いた。どうしてもリアハッチに置く気になれなかったのだ。ほんの何時間前かまで生きていたものを荷物扱いする気にはなれなかったのだ。それは多分、僕がそもそものところで「死、というリアリティに慣れていなかったせいなのだろうけど。



国道を東に十キロほど行ったところにある川原を目指して僕は車を走らせた。それが動物の死に対しての正しい手続きでないことは知っていたけれど、電話をした保健所に「燃えるごみで出して」と言われた時点で、もう僕は正当な手続きを踏む気など無くしてしまっていた。僕の中で、死に結びつくイメージは燃えるごみではなかった。不法投棄で訴えるのなら、人権侵害で逆に訴えてやろうじゃないか。それくらいの気持ち。だって、そう思わないか？ 燃えるごみ。馬鹿にしているじゃないか。僕もリリーも、そんなつまらない存在じゃない。

道は殆ど車どおりがなく、順調に流れていた。信号もオービスも無い片田舎の小さな国道。僕は、アクセルを出来る限り強く踏んだ。速度はすぐに制限を越し、ボロ車が悲鳴をあげはじめたのが分かった。少しでも早く川原に行きたかった。そこには、筋の通る理由なんか存在しない。死が、力強く僕の背中を押していた。



川原の、青々とした草が一際生い茂っている辺りに僕は穴を掘り、その中にリリーを入れた。せめてと思いい手を合わせ、冥福を祈り、声に出して「さようなら」を言った。

「さようなら。また、どこかで」

僕と彼女との間に生まれたひと時の沈黙。その隙間からかすかに“嫌なこった”と聞こえてきたような、そんな気がした。



川原からの帰り道、僕は缶のコーラと煙草を買った。車に戻ってコーラを一息に飲み干し、それから煙草を吸った。窓なんか一センチだって開ける気にならなかった。灰皿なんか一ミリだって開く気にならなかった。ドリンクホルダーに置いたコーラの空き缶に、灰も吸殻も落とした。すぐに二本目に火を点けて、助手席のシートに十一個目の焦げ痕を作った。炎の先端を押し付けると、くすぶったまま少し煙が上がった。シートの座面はすぐに穴になって、中の黄色いスポンジが顔を出した。僕はその煙草をそのままシートでもみ消して、コーラの缶の中に再び落とした。

色々なことが嫌になった。感傷めいたことを言いたくはないけれど、自分の決めたルールがいかにか馬鹿馬鹿しいか、という事に僕は気づかざるを得なかったのだ。誰かの死、というやつは気がつかないうちにこちら側の生を作り変えるのだ。それが、例えば縁もゆかりもない野良猫の死だったとしても。

平等にやってくる死は、平等に、誰かに何かを残していく。残された僕が自分自身の馬鹿馬鹿しさに気がついたのだから決して不自然なことじゃない。あらかじめ決められていたかのように自然に、そして唐突に、それはやってくる。何が正しいとか正しくないとかそんなもの、どうでもいい。どうでもいいのだ。僕という存在がどんなものであろうと、何を成し遂げようと、何をしくじろうと、何も変わらない。例えば僕が一流のミュージシャンだか俳優だかだったとしても、やはり同じようにリリーと出会い、死に立会い、こうして埋めに出かけたのだと思う。僕の家ガレージに停まっている車がオンボロのスターレットなんかじゃなく、BMWのスポーツセダンだったとしても、きっと。

国道の長い直線。僕の思考はどこまでも連なり、終わりの、その気配すら見せなかった。煙草の残り香、コーラのべたつきと、死の気配。油断していると、今にも追いつかれそうだった。

逃げ出すかのようにアクセルを目いっぱい踏み込むと、リアハッチから空のダンボールが転がる音が聞こえた。ラジオが、遙か彼方の渋滞を報告してきた。思考の中で暴れるリリーの影ごと、力いっぱいラジオのスイッチを殴りつけた。ラジオは断末魔を残して受信を中止し、それを合図にして、世界の終わりのような雨が降ってきた。ワイパーのスイッチをいれたけれど、動く気配すらなかった。

4 1 2 9。それが我が家の番号だった。正確に言えば土地の番号だが。街の取り決めで全ての建物は縦三十センチ、横三十センチの正方形一杯のアラビア数字で、家の正面、目立つところに土地の番号を掲示しなければならないということになった。工事費用は街の予算から出るけれど、各建物に掲示されるプレートはそれぞれ自費で購入しなければならなかった。金メッキかステンレスが選べて値段は一文字三千元。僕のところのように四枚だけの区画はいいけれど、1 0 0 0 0から始まる五桁区画に住んでいる人々からは不公平だと声が上がった。簡易裁判に持ち込んだ人もいた。プレート制度のことを知っていれば四桁の区画を購入したとか、それらしい理由を弁護士が用意したようだった。四桁にしろ、五桁にしろ、無駄な出費には変わらない。

隣のパン屋と逆隣の戸建ての住民がそれぞれステンレスを選んだことが分かったから、僕はそれより少し遅れて金メッキを買った。工業者が来て、僕達の住む区画を車両通行止めにしてクレーン車で順番に取り付けていった。4 0 0 0から4 3 3 2までで片側が終わり、4 3 3 3から、4 8 5 0までで逆側が終わる。小さな路地の中に立つ建物を相手に工業者が四苦八苦している様子が僕の家、二階の窓からよく見えた。予定よりも十分くらい遅れて僕の家の前に着くと、「4 1 2 9さん、メタリックゴールドカラーで間違いないですね。着けますよ、いいですかー」という大声が二階で様子を伺っていた僕に投げつけられた。誰が4 1 2 9さんなのか。何が、メタリックゴールドなのか。馬鹿馬鹿しくて、いつもの五倍は大きな声で「いいですよ」と怒鳴り返した。「ご迷惑おかけします」というお約束の台詞に頷き返す気は無かった。

工業者は壁に小さな穴を四つ開け、悪趣味に光る `4、のプレートの四隅に空いている穴と合わせ、プレートと同じ色のビスを電動の機械で埋め込んでいった。それが四枚分。作業時間二十分程度。「ご迷惑おかけしました」。全くだ。すぐに、隣のパン屋の方から「4 1 3 0さん」という怒鳴り声が聞こえてきた。 `パン屋、と呼ばれるだけで「そんな名前じゃねえ」と怒るような人だから、今頃、ものすごく怒っていることだろう。良いことだ。あの主人は怒った時のほうがいいパンを焼く。隣で十年生活してみてそれがよく分かった。特に、チリソースがかかったソーセージロールは、主人の怒りの度合いが大きければ大きいほどに深みのあるいい辛さになる。彼が激昂している時の `チリ・ソーセージ、は僕の好物なのだ。後で買いに行こう。パン屋の前で今にも殴り合いになりそうな様子で対峙しているパン屋と工業者を眺め下ろしながらそう思った。窓を閉めると、外から悲鳴のようなものが聞こえた。工事屋がぶん殴られたのかもしれない。

*

街の外から来た人が、今何処にいるのかすぐに分かるように。街全体が整然とした一体感を持てるように。行政は、何故このプレート制度を義務化しなければならないのかを様々な理由で説明した。悪意の反論者は、「番号管理することによってトップダウンの管理社会を作るため」だの何だの、行政側に負けず劣らず、小難しい理由を並べ立てた。僕やその他大勢”どちらでもいい”住民は、無駄な出費としかこの制度を思っていなかったし、別に番号管理されていても後ろめたい部分は無かった。確かに、税金の滞納世帯が番号でリストアップされてくれば、取立てに回る下請け業者は随分と楽なことだろう。将来的には電話番号もプレート制度によって見えやすくなった番号と同じものすることを行政側は発表していたから色々なことの労力が省けることには違いなかった。馬鹿馬鹿しいけれど、それほど悪い制度でもない。どちらでもいいと考えている人間のおおよそ一致した見解だった。

そんな成り行きで、僕の家は4 1 2 9になり、隣のパン屋は4 1 3 0、よく行く床屋は5 3 5 3、書店は3 9 3 1。僕が友人三人と共同で興した小さなオフィスは9 0 7 1となった。こうして、僕のこじんまりとした世界に沢山の数字が並んだ。

*

工事が一通り済んだ頃合を見計らって隣のパン屋へ行くと、主人が一目で分かる苛立ちを浮かべながらレジで新聞を広げていた。「やあ、こんにちは」僕がいつもどおりの挨拶をすると、主人は僕の方を少し見て、再び新聞に視線を落

とした。機嫌が悪いときの主人は誰にでもこうだ。だから僕も気にしないことにしている。目線をあげただけ、まだ気持ちにいくらかは余裕があるのだろう。

「何が番号制度だ、馬鹿馬鹿しい」

「チリ・ソーセージ、を二つ乗せたトレイを持ってレジに行くと、それを待っていたかのように主人が毒づいた。

「馬鹿な役人どもを余計に楽させてどうするんだか」

僕は適当な相槌を打つだけにとどめて、会計を済ませて逃げ帰った。腹が空いていた。あれに取り合っていると、すぐ日が暮れる。僕の胃はそれまで待っていてくれそうにはなかったし、そこまで暇でもなかった。

*

家に戻って、二階の、さっき工事を眺めていた窓の縁に腰をかけてパンを食べた。チリ・ソーセージはしっかりとした辛味が効いていて、パンの焼き加減も申し分がなかった。あの主人には、高血圧で死なない程度に毎日怒り続けてもらいたい。

食べ終わって、身支度をして、家から自転車で二十分ほどのオフィスに向かった。ナンバー9071。幹線道路とは一本ずれた片側一車線の道に面している。それなりに騒々しい場所だ。人通りも、車どおりも少なくない。いかにも個人経営的な小さなオフィスだから、すぐにセールスマンが入り込んでくる。昨日はコピー機のリース営業が来たし、一昨日は社用車のリース営業が来た。その前は文房具の事務所向けカタログ通販の案内。小さな街で、いつも誰かが何かを貸したがっていたし、売りがっていることを僕は毎日のように再認識させられる。今日は週に一度の全休だから、オフィスのドアの隙間には、ドアが捻じ曲がるほどのダイレクトメールが差し込まれていることだろう。

オフィス全休の日に、僕は必ず出勤することになっていた。その代わり、全員が出ている日に僕は二日間の休暇を毎週取っている。全休の日にしか出来ないことや、全休だからこそやっておきたいことをするために、僕と、他の共同経営者で話し合って決めた。今日は、アルバイトの女の子の給料を計算して、太古の昔に遺棄された神殿のようになってしまっている自分のデスクの整理、溜まった伝票の処理。それに、オフィスの指定した位置にしっかりと9071のプレートが取り付けられているかの確認をしなければならなかった。

僕達のオフィスでは海外から本を取り寄せて、大まかに翻訳し、それを提携先の出版社に紹介、出版用の本格的な訳を作る仕事をしていた。仲間に海外留学していた経験のある人間がいたから思いついたシステムで、僕達四人とアルバイト三人がなんとかやっていける程度には収益を上げることが出来た。共同経営者の一人、留学経験のある人間を向こうに常駐させ、良さそうな本を送らせる。アルバイトがそれを簡単に翻訳し、僕や、他の共同経営者がこちらの出版社に掛け合う。ゴーサインが出たら、向こうに常駐している仲間がその本の権利関係を調べ、権利者と交渉する。リベートを何パーセント支払えばいいかを決め、著者独特の表現の意味合いを確認し、最後に権利者の名前の正しい綴りを確認してこちらに寄越す。僕達はそれをもとに正確な原稿を作り、出版社側に渡す。あらかじめ出版社側と儲けを試算して、うちに入るマージンを調整しておく。うまくいく本もあれば、完全に当てが外れるものもあった。しばしば、出版社側から依頼されて向こうの本を翻訳したり権利関係を調整したりしているおかげで僕達は食いつなぐことが出来ている。幾つかの出版社とは信頼関係を築けているし、向こうの何人かの作家や研究者には、訳が丁寧だと褒められることもある。そんな感じでまあまあ、上手くいっていた。

*

休日のオフィスはいつでも、抜け殻のような虚しさに満ちている。今日も同じ。FAX複合のレーザープリンターがかすかに音を立てているだけだ。空調もついていないから空気が流れがひどく淀んでいて、僕が扉を開けて中に入ると、目に見えない色々なものが、机やプリンターやロッカーの陰に隠れたようだった。予算を切り詰めた賃貸のオフィス。この辺りには珍しい平屋で、僕達が入居するまでは廃工場の片隅の倉庫のようなみすぼらしさだった。机と椅子とペンと紙。それだけあれば何処でだって仕事は出来ると、作った当初は本当にそう思っていたのだ。

プレートは指定した場所にしっかりと収まっていた。9071。問題無し。曲がってもいなかったし、下から見上げる限りでは作業者の指紋で汚れていたり、部品の一部が欠けていたりということもなさそうだった。これからは夜間に入る清掃業者にチップを渡してプレートも拭かせることにする。

どのような物事においても、僕は「達成、よりもその「維持、に注力するのが好みだ。難易度が高く、バランス感覚を必要とする。一度崩れると、修復は、ゼロからの構築なんか比じゃないほど難しい。それはあらゆる物事において一つの事実だ。僕は実体験から知っている。

*

少し昔の話だ。このオフィスがまだオープンしたばかりの頃。机と椅子と文房具ではとうてい仕事にはならない、という事実によりやく気付いたころのことだった。僕達は手分けして作業に当たっていた。留学経験者の友人は既に行こうに行っていたから、僕達は、僕を含めて三人という少人数で、「まともに仕事になる環境」を整えるために動いていた。長ネギのような顔をした友人はひたすらリース会社から見積もりを取り寄せ、少しでも安くOAを整えようとしていた。満月のような顔をしたもう一人は文房具などの小物で不足しているものを調達したり、机やらコンピュータやらのレイアウトを考え、少しでも近代的なオフィスに見えるようにすることに尽力していた。僕は、友人三人と僕の給料を決め、必要になるであろう支出額を算出し、そのためにこなすべき仕事量を想定し、必要最低限のアルバイトを雇うために方々に声をかけていた。

僕が雇ったのは、向こうから送られてくる本をざっと翻訳して内容を整理するための人員三人。そうしかったわけではなかったけれど、応募してきた人間何人かの中から語学力だけで決めたら、全員が女の子だった。僕はそのうちの一人とすぐに恋人関係になり、オフィスが安定軌道に入ったかと考えられるようになった頃に結婚して、出会って初めてセックスをするまでの期間よりも短い結婚生活ののちに離婚した。今僕が住んでいる4129番の家、二階建ての家は、結婚生活中に借りる手続きをして二人で住んでいた家だ。彼女は今、電車で五時間以上も離れている実家に住んでいるらしい。あらゆることは維持の努力も虚しく崩壊していく。僕はこの時に、嫌というほど知った。そしてより、オフィスの運営に注力するようになった。

*

休日のオフィス。静けさ。僕は溜まった伝票類を一枚ずつコンピュータに入力しながら、そろそろ事務スタッフを増員しようか、と考えを巡らせた。単純に考えて月にどれくらいの利益を出せるか。僕が煩雑な作業から開放されることによって得られる費用対効果は。それは僕のこの生活を、このオフィスをより磐石な、維持の容易なものとなるための前進となりうるかどうか。僕の休日出勤は、こういった思考が盛り上がり、少しばかりの沈静を迎えるあたりでいつも終わる。

*

帰り道、急に降り始めた雨が重い足取りをより重くした。自転車に跨る気持ちも起きない。ため息をついたらげっぷが出て、昼に食べたチリ・ソーセージの気配が口の中に広がった。

僕はどうして今、こんなにも憂鬱なのか。事務スタッフ増員の件を考えすぎて疲れたせいだろうか。いきなり鳴った電話で、翻訳進行中の本——世界中の海を旅する船と、港町の話——の出版見送りが決定したことを知らされたからだろうか。こんなこと、よくあることなのに。

随分、昔のことを思い出した一日だった。4129番。普段意識もしない家の番号を強引に見せつけられたからだろうか。四月一日生まれの僕と、十二月九日生まれの、かつての妻。ありふれた話だ。覚えやすい、と喜んで賃貸契約書にサインした。引越しの日も、隣のパン屋のおやじは、「うるさい」と言って怒りながら、格別の味のチリ・ソーセージを焼いていた。

色々なことがひどく面倒に感じられた。いつものように僕は家に帰る。シャワーを浴びて、酒を少し飲んで、着替えて眠る。朝になって、自転車に乗って、パン屋でチリ・ソーセージを買ってオフィスに行く。そこにあるのは、昔のことなど思い出す暇も理由もない、現在進行形の日常だ。僕は僕でしかなく、オフィスの維持と成長を考えながら上がってきた大まかな翻訳と原本を見比べる。アルバイトの翻訳スタッフに指示を出して、訂正させる。夜になったら家に

帰る。次のオフがいつで、後どれくらい頑張ればいいかを明確に頭の中に思い描きながら自転車のペダルをこぐ。分かりきったことだ。僕が、何処に憂鬱を感じる必要がある？

帰り着いた家はいつものように、暗く、整然としていて、冷たかった。誰もいない、真夜中の港のようだった。ポート4129。一日の終わり。明日朝、ポート4129発、ポート9071行き定期便。明後日は予定の運休。僕は憂鬱さを振り払えないまま、冷蔵庫の中に冷やしておいた缶ビールのプルトップを開けた。隣の家から、何に腹を立てているのか、パン屋の親父の「バカヤロー」という怒鳴り声が聞こえてきた。おっしゃるとおり。返事だけ一応、しておいた。